

日本赤軍総括(一九八一年三月七日)

前史―第二次ブント―赤軍派

第二次ブントの形成

3、六〇年代後半の闘いとブント七回大会

日韓闘争にはじまる六〇年代後半の高揚は、ベトナム反戦闘争の高揚へと引き継がれ、三里塚、砂川闘争へと発展した。六七年一〇・八羽田闘争において、角材とヘルメットで武装した全学連、反戦が、機動隊と激突した。それ以降、全学連、反戦の武装が開始され、ヘルメットとゲバ棒スタイルが定着していく。六七年一一・一二第

二次羽田闘争において、機動隊はじめてジュラルミンの楯を登場させ、全学連、反戦との激突をエスカレートさせた。この間、市民の間では、ベ平連(ベトナムに平和を)市民連合)が結成され、青年労働者の間では、反戦青年委員会が形成され、労働者の一部、市民の間にも闘争は拡大していった。

情勢的には、米帝は一九六五年北爆を開始し、ベトナムへの侵略は泥沼化し、国際的には、米帝本国内を含めた反戦闘争が高揚していった。

一九六八年中国では、文化大革命が発動され、六七年一〇・九には、ゲバラがボリビアで闘争の中で戦死し、フランスでは、六八年五・一〇、五月革命が起り、国際的な反帝闘争の高揚がくりだされた。

それらの内外の情勢の高揚を背景に、六八年三月二三日、ブント(共産主義者同盟)第七回大会が開催された。ブント第七回大会は、一〇・八以降の過程を「プロレタリア国際主義と組織された暴力の復権」という総括をもって開かれ、その中で、マル戦派が分裂した。

ここでの基本的な対立は、マル戦派の理論であった岩田帝国主義論を体制危機論、革命戦略論を「一国―アジア―世界」(第三段階ロケット論)として措定した待機主義的傾向をもった「先進国革命論」として批判し、「プロレタリア国際主義と組織された暴力」の立場をもつものとして「世界同時革命論」を対置した。

これは、現実の国際階級闘争の発展の歪曲した反映としてあった。第七回大会をとりまく情勢が、ベトナム民族解放闘争を軸に、国際的な階級闘争の同時的な煮詰まり、そして、一〇・八以降の大衆的な「武装」の開始を反映している。しかし、それをどのように目的意識的な権力奪取の陣型へと組織するのといった時に、自らの

主体を抜きに、情勢の自然発生的高揚に対して、それをストリートに革命論化し、世界同時革命、世界革命戦争、世界党―世界赤軍―世界プロレタリア統一戦線形成へと短絡させてしまっている。

積極的な意義としては、現実の国際的な階級闘争をとらえようとしたものであるという点にあった。

根本的な問題としては、情勢を認識していくときに、自らの主体を抜きにしてとらえるところからの誤りとなっている。認識する主体自身の発展段階の規定と、それ自身をも否定して、変革していく立場がなければ、自然発生的な高まりを、自らの指導性によるものと錯覚し、自然発生的性へと拝跪していることが目的意識性と取り違えられてしまっている。問題のたて方が、情勢認識↓戦略戦術となりたてる方針の大きさと現実の力量が全くはずれたものになり、主観主義的実践へと至ってしまう。

4、「八・三論文」―「過渡期世界論」

ここで、「八・三論文」をみていき問題を具体的にとらえ返していきたい。なお「八・三論文」とは、六八年八・三国際反帝反戦集会へのブントの提起した文書である。この論文の評価をめぐって、後に連合ブントと赤軍派と

の矛盾となっていく。

まず、基本認識として

「ロシア革命成立以降、更に第二次帝国主義戦争を経ての中国をはじめとする諸労働者国家群の成立をもって、ますます、労働者階級の攻勢は激化しつつある。労働者国家群を媒介に各国労働者階級は、自然発生的、即自的、或いは歪曲され、疎外されながらも世界的に結合され、世界プロレタリアートへと転換した」ということから出発している。

そして、「帝国主義は、階級対立を国家間対立として統一することを困難にされつつある。何故なら、内のプロレタリアートを支配せんとすれば、外の労働者国家全体を、即ち世界プロレタリアート全体を支配する能力を保持しなければならなくなったからである。国外の階級闘争に反革命に介入せんとすれば、同様に内のプロレタリアートを粉砕せずには、即ち世界プロレタリアートを粉砕する能力をもたねばならなくなったからである。」

「五〇年代から、六〇年代前半の帝国主義国家は米帝国主義以外、特異な侵略、反革命同盟を結ぶことを支配の機能の重要な要素としてあった」これは「本質的に以前のブルジョアジーの攻勢、プロレタリアートの防衛の

関係が逆転し、プロレタリアートは攻勢を展開する力を保持したことを意味する」

これが過渡期世界論である。歴史的発展段階としての認識として不十分であり、これは、発展段階の現状の規定としては、成立していない。

次の展開を見てもらいたい。

「労働者国家の労働者、人民は一国社会主義Ⅱ二段階戦略によって、自己の歴史的優勢の力としての労働者国家をプロレタリア独裁を形態として世界革命根拠地国家たることから疎外された。帝国主義の包囲下での、しかも後進国での経済政治面にわたる社会主義建設の困難性の克服の方向は、唯一自らが世界革命根拠地として、世界プロレタリアートの攻撃的革命的防衛たることによって、世界社会主義を展望する世界革命政治の一環としての国内プロレタリア政治としてのみ設定される。」

「スターリン主義の発生基盤は、帝国主義の包囲中の経済建設の困難性、主体的には、その克服の方向を攻撃型世界革命戦略を解明し、その下にプロレタリア独裁擬制的労賃制を結合させず、一国社会主義Ⅰ二段階戦略、プロレタリア独裁の放棄、出来高払いの導入として攻撃的自衛性に拝跪し、ついには、マルクス・レー

ニン主義を放棄したことになる」としている。

基本的な歴史的な発展段階の普遍的本質の認識が、それぞれの普遍の本質をはらみながら、同時に他と区別される特殊性のとらえ返しへ向かわず、ここから具体的適応において間違ってしまう。

一国社会主義からの出発は、現在のな世界の歴史的な発展段階においても、各国のそれぞれの歴史的な発展段階は一樣でなく、特殊性があり、世界的な歴史発展段階をそのまま持ち込む訳にはいかない。そして、その社会の発展段階に規定された主体は、それ自身で、すべて普遍的ではありえない。それは、「スターリン主義の誤り」を指摘するブント自身も、その中に規定されている。そのことを忘れてしまえば、普遍性として言えることが、特殊性の問題を抜きに、今の現実置き換えられしてしまう。それは、主観主義になる。

確かに、一国における経済建設は、困難であり、その社会発展段階の特殊性に大きく規定されている。そこで、問われているのは、特殊性を体現している自力更生の人民の力によってその困難を解決しつつ、国際的な革命の勝利に向かって、普遍性に向かって、同質化しあうことである。その段階を飛び越えて問題をたてること

は、最大限綱領主義の空論となり、主観主義に落ち込む。「現代世界に於いて本格化された現代帝国主義国家の危機は、不均等発展の貫徹とそれが、攻撃型階級闘争に阻まれることによって、内部矛盾を経済的に膨張してでも、政治的には、全面的侵略戦争に直線的に外化し得ず、逆に外化したものを政治的には内在化するところからの高度の階級矛盾の激成―それが経済危機と結合した地点で革命と反革命として政治的に発現する構造をもつ。帝国主義の侵略、反革命は、国内反革命と一体化して発現する。だから、革命の条件は、全面戦争の前段で成熟せざるを得ない」

ここでは、要するに、帝国主義が不均等発展の中で、帝国主義間戦争に至るといふことは、現在の世界では阻まれていて、矛盾が外に出て解決されず、内に蓄積されて、経済危機と結合したときに激化するとしている。帝国主義が侵略、反革命を進めようとするれば、国内での革命圧殺と一体でなければ進み得ず、だから帝国主義の全面戦争の段階で、革命の条件が成熟するとしている。ここから「なしくずしファシズム論」「前段階武装蜂起論」が出てくる。現代帝国主義の一般の規定としては、間違っていないが、革命の条件を帝国主義間戦争においてとらえ

るとらえ方が出ている。また、マル戦派的な体制危機論から革命の条件を説明することの批判として出発しながら、同じ傾向をもっているといえる。「攻撃的」という内容が、ここでは、そうなる前に、運動的に牽引していくということになってしまっている。戦争という外在的な条件の形成を革命条件としてとらえており、そこでの階級闘争の内実がいかなるものか、それは、主体条件の形成が軽視され、急進民主主義を革命的ととりちがえる内実をはらんでいる。

そして、「これに対して、プロレタリアートは世界党の指導の下、世界プロレタリア統一戦線の一環として、正規軍を赤軍として組織し、帝国主義の普遍的危機を見通し、自らの政治過程を革命戦争とし世界同時革命を実現し得る」「プロレタリア革命の型は」「昂然たる革命戦争を不断に組織し、結合、持続し得る党―赤軍―プロレタリア統一戦線（ソビエト）の系列が準備され、これを基礎に、中央権力闘争とそれへの陣地戦の統合が運動的に整理されねばならぬ」

「かかるプロレタリアートがブルジョアジーの動向まで見通し、計画的に戦術を展開し、政治過程を主導し抜くプロレタリアートの主体的攻勢とそれを攻撃の理論とし

て統一しきれる質は、プロレタリア革命の戦略―戦術論の内実を受動的なものではなく、自己の将来の計画に逆に敵ブルジョアジーの動向を組み込んだ戦略的展望の下に現在の戦術の設定する攻撃的戦略―戦術論として根底的に認識しなおさなければならない」

この最後のところが赤軍派が「八・三論文」の意義として考えており、「世界党―世界赤軍―世界革命戦線」の形成が十分に提起されていないことにあるとした。以後、赤軍派は「攻撃的」という立場をもって「党の革命」を展開していくことになる。普遍性として各国革命が同質化している方向をもっているととらえたとき、普遍性をそのまま戦術化したものになっている。「攻撃性」が特殊性に対して普遍性として対置するものになっている。赤軍派が「受動的でなく」と否定する時、レーニンの時代のものとしているが、果たしてレーニンは戦術問題をどうとらえていたのか。

レーニンはプロレタリアートの戦術についてこう言っている。「マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本的な任務を、彼の唯物弁証法的世界観のすべての前提に厳密に一致して規定していた。ある社会のあまざず、すべての階級の相互関係の総体を客観的に考慮すること、しを行わなければならない」としている。

レーニンは、それを党の役割として「(一) 確固たる継承性をもった指導者の組織がないなら、どんな革命運動も持久的なものになりえない (二) 自然発生的に闘争に引き入れられて、運動の土台を更生し、運動に参加してくる大衆が広範になれば、なるほど、こういう組織の必要性が、いよいよ恒久的でなければならない。…」と主張している。

根本的な路線戦術における歴史的普遍性と情勢からどうやるのかというプントに対して、レーニンは、歴史的条件そのものは変化していくことを前提にして、党の主体の問題として、変化を一貫して利用しながら、「二〇〇年を一つに圧縮した」偉大な日々がきたときに偉大な任務を実践的に解決する能力をこの階級のうちに創り出す」ために、主体力量の形成をはかるといふ風に問題を立てていて、それがあらゆる情勢の中において、能動的に切り開いていく条件の形成と考えている。

たがって、この社会の客観的な発展段階をも、この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮することだけが、先進的な階級の正しい戦術の土台となり得る。この場合、すべての階級とすべての国が静態において、すなわち、静止の状態においてでなく運動（この運動の諸法則は、それぞれの階級の経済的な生存条件から生まれる。）において、考察される。この運動そのものは、過去の観点からだけではなく、また、未来の観点からも考察され、しかも、ゆるやかな変化しか見ない『進化論者』の卑俗な考え方によってではなく、弁証法的に考察される」と。これがマルクス・レーニン主義の戦略・戦術問題の基本的な観点である。更にレーニンは、

「どの発展段階にも、どの時期にも、プロレタリアートの戦術は、この客観的にさけられない人類史の弁証法」

「大きな歴史的發展においては、二〇〇年は一日」にも等しい。』も」とも、その後で二〇〇年を一つに圧縮した数日があることもあるが」というマルクスの見方）を考慮に入れて、一方では、先進的な階級の意識と力と闘争能力を発展させるために、政治的停滞の時期、また、亀の歩みのようにのろくさい、いわゆる『平和的』発展の時期を利用するとともに、他方では、その階級の運動の

回性、現在の情勢が高揚しているということから問題をたて、そこから党建設を語り、そこでの特殊性としての主体条件の形成の問題が抜けてしまい、実際には攻撃的でもなんでもなく、情勢に合わせた受動的な党建設の立場にすぎない。従って、その世界同時革命も世界革命戦争も、世界党―世界赤軍も、全く空論になってしまふ。

レーニンとは、根本問題として「マルクスは、プロレタリアートの戦術の基本任務を、彼の唯物弁証法的世界観のすべての前提に一致して規定していた」と提起している。唯物弁証法的とらえ方とはどういうものであろうか。レーニンは「再び労働組合について」の中で、「対象をほんとうに知るためには、そのすべての側面、すべての連関と『媒介』を把握し、研究しなければならぬ。われわれは、けつして、それを完全に達成することはないだろうが、全面性という要求は、われわれに誤りや、感覚喪失に陥らないように用心させてくれる。これが第一。第二に、弁証法的論理は、対象を、その発展『自己運動』、変化においてとらえることを要求する。」「第三に、人間の実践全体は、真理の基準としても、対象と人が必要とするものとの連関の実践的規定者としても、対象の完全な『規定』にならなければならない。第四に

「抽象的真理はない、真理はつねに具体的である」と規定している。

この中で、根本的な問題は、三番目に提起されている人間の実践自身、その対象を規定しているもの自身を対象の中に入れなければならないということを行っていることである。すなわち、主体的なとらえ返し、我々の言葉で言えば「自己批判」の立場がなければ、弁証法的ではなく、一面的、主観主義的なものに陥ってしまうということがある。

ブントの一貫した問題のたて方は、自己自身を「対象の完全な『規定』」に入れていないことにある。そのことが、ブントの実践を誤ったものへと導いている。

5、第二次ブントの基本的な問題

第一に、問題のたて方が、第一次ブントの敗北の克服からではなく、自己肯定の側から出発していることに根本的な問題があること。

第二に、それ故、第一次ブントの敗北の根拠であった運動展開に指導性を置くなり方が、総括されずに継承されていること。これは、党建設論なしの運動論になっていることである。

第三に、情勢のとらえ方が、主体を抜きにしたとらえ

方になり、そこが空論的な方針を導くに至っている。一
国革命不可能論→同時革命論へ

第四に、自らが学生運動を基盤にしたものでしかなく、六〇年代後半の高揚自身が学生、市民を中心とした、戦争とファシズムの危機意識の上にある急進民主主義運動であることのとらえ返しがなく、その戦術のエスカレートに運動の発展を考えている。

結局、第二次ブントは、第一次ブントを肯定して出発したために、六〇年代後半の新たな情勢の中で、再び、大衆の自然発生性に、自らの自然発生性を持ち込み、自然発生性の終焉と共に、その組織を解体した。

その解体を促したものは、赤軍派の党内闘争であつた。

赤軍派の主張と党内闘争

1、赤軍派の主張

七回大会、「八・三論文」を経て、ブントの結集軸が明確になっていたが、一〇・二―防衛庁闘争、それに続く、六八年一月の第八回大会において、大会議案が採択されない混迷した大会となり、内実において、左派、中間派、右派の三潮流が派生していた。

赤軍派は、すでに述べたように、「八・三論文」を「攻撃型階級闘争」「攻勢の戦略戦術」と評価し、その不十分として、世界党―世界赤軍形成を具体問題に煮詰めていないことにおいていた。そして、赤軍派は、「攻撃型階級闘争」「攻勢の戦略戦術」から、建党・建軍の内実までとらえ返し、「党の革命」を主張した。

情勢認識としては、第一に、一〇・八以降から東大闘争の過程を「デモよりも大きく、革命よりも小さい」と評価し、第二に、その情勢を革命へと切り開く鍵を「赤軍」の建設においた。第三に、高揚の解体敗北は、「見えており、敵のなしくずしファシズムに対して、権力闘争を体験させることによって、闘いは敗北しても、新しい飛躍の質が得られる。第四に、混乱は蜂起の時期設定の一要素であるが、それは運動の転換が歴史の転換と一致する時であり、現在の高揚期の運動転換と秋の佐藤訪米、即ち、ブルジョアジーの側から第二次大戦の克服に対して、プロレタリアートの側から克服して行くという歴史的転換が合致しており、これは、武装蜂起の明確な必要性の指標である。第五に、六・五第一次東大時計台占拠も、六五年以来の運動の歴史的転換として混乱があり、蜂起＝運動の飛躍としてあり、全共闘運動という新

しい波をつくった。第六に、蜂起を行うにあたっては、新たな飛躍の形態を示すべきであり、臨時革命政府のスローガンを掲げること。第七に、党軍の形成過程で、人民が団結するのであり、革命戦線とはそういう時代の機関であり、秋の蜂起に向けて、意識的にこのような党軍―戦線をつくらねばならない。と規定した。

路線は、六九年秋「前段階武装蜂起―世界革命戦争へ」であった。その「党軍」の蜂起によって、六九年の階級闘争を牽引し、質的転換をかちとるというものであった。

党建設においては、「われわれの党建設論は、レーニンの『何をなすべきか』的党軍建設論の『八・三論文』的方法論による過渡期世界の能動性を体现する党軍建設論として止揚したものである。レーニンの党建設論は、全国政治新聞による共産主義意識形成と新聞の受任者網によって、ひとりでつくられる組織の軍事組織化ということになっていく。だが、その職業革命家の党内生活は、個人個人まちまちである。こういったものから党内生活までも共産主義化していく、過渡期世界にふさわしい党軍建設論である」と、主張していた。

この立場は、第一次ブントから継承された運動的突破

かった。

赤軍派が論拠にしていた基本認識、一〇・八以降の過程を「デモよりも大きく、革命よりも小さい」としていることは、革命前後を意味しており、果たして、大衆の自然発生性はそのようなものであったらどうか。六〇年代後半の階級情勢の高揚とは、あくまで反戦闘争を軸にした学生・市民を中心としたものであり、人民の圧倒的多数をしめる労働者階級の質的な転換ははじまっていない。それは、戦後の高揚期とも、六〇年安保闘争とも質的には異なるものであり、だからこそ、敵は機動隊の力だけで押さえ込むことができたのである。学生運動＝革命運動として出発している観点からは、その点を見ることのできなかつたのである。「攻撃型階級闘争論」を論拠にした党軍による戦争過程での人民の団結の形成という指導性のとらえ方は、党の役割を、一面的にとらえ、人民総体を統合する役割を、軍事によるエスカレートにおくことになる。人民を統合することは、運動論において一時期有効に果たし得る場合もあるが、それはあくまでも戦術であって、それ自身は変化するものである。基本は、如何に、あらゆる情勢・あらゆる事態の中にあっても、蜂起の陣型と能力を形成し続ける党組織こそ問題に

を更に軍事による突破へとエスカレートさせたものであり、基本は、六九年秋に「前段階武装蜂起」を貫徹することによって、新たな飛躍をかちとるというものであった。

その立場は、過渡期世界論からの「攻勢の戦略戦術」によって根拠づけられており、その内実は、党軍が戦争を遂行することによって人民を団結させるという立場であった。

そして、党軍建設論のレーニンを越えたとする内実は、隊内共産主義化という問題意識をもっているが、それは、軍事を担うための集団生活、基準は個々人の価値観に置かれていた。ベトナム、中国から学習したことになっているが、紅軍や解放軍の形態的模倣にすぎず、日本階級闘争の中からとらえきれず、その分、思想的な統一性へと至っていない。

この主張は、程度の差においてブント総体、一般的に新左翼の中に存在し、赤軍派が、第八回大会以降、ブント内での牽引性を持つに至っている。しかし、ブント内の他の諸派も、「中央権力闘争とマッセンスト」「連統的蜂起」を対置するなど、その根本への批判ではなく、赤軍派によって極端化されたものへの戦術的修正でしか

ならなければならない。これが、レーニンの基本思想であり、能動性であり、主体性である。中国紅軍、ベトナムの人民解放軍の例がだされているが、それは、戦争によって人民を団結させたのではなく、党が一貫した人民の闘いの総体を統合する能力をもっていたからであり、軍事は、その一つの戦術であった。

過渡期世界の能動性というものを、敵の打倒という一面においてとらえ、味方をどのように統一し、その内実を不断にどのように変革するかということに価値がおかれていない。自分達が軍事を担うことを中心においており、レーニンの「労働者階級の自己解放のたたかいたを援助」するという役割のとらえ方からは、全く異質なものととなっている。この傾向は、多かれ少なかれ新左翼の中に存在し、私たちの中にも存在していたものである。

また、隊内共産主義化という問題も、基本的には、これまでのあり方では軍事を担えないという観点からとらえられ、思想的な統一という問題として立てられず、実体としては、内実の統一されていない軍人のモラルとしての意識と他への優越心として形成されるような実体であった。この問題意識は、飛躍が問われる度に生まれてくる。連合赤軍においても、我々においてもそうであっ

た。連合赤軍はそこから敗北していった。

2、党内闘争

赤軍派の党内闘争についての考え方は、こうであった。「党内党をつくり、党内党の決定が、ブントの決定よりも優先し、党内党はブントと統一戦線を組むものである」「政治局の無指導に対して、党内党によって党を指導していくことを決め、党大会によって党の指導部になることを当局面の最大重要課題として」党内闘争を開始した。

ブントは、ブント八回大会で混乱し、一〇・八以降の闘いをどのように発展させていくのかにおいて方針を提起しえず、混乱した。赤軍派は、そのような中で、軍事委員会を中心に方針を領導した。しかし、四・二八の総括をめぐって矛盾が浮上した。赤軍派フラクは、四・二八敗北という総括から「秋季武装蜂起」によって突破しようとして党内党を形成していき、組織上の運営とか一切を無視して行った。そのことが、他のフラクの反発を招き、対立となっていた。逆に赤軍派の側からも、反赤軍派諸派が分派活動をしている、自分達の中央委員会開催の要求を踏みにじった、と非難した。

そして、それは、七・六事件として爆発する。赤軍派

とブントは分裂する。それは、赤軍派の党内党活動が激化していく中で、それに対して七月六日、ブントの諸派が、赤軍派を物理的にも解体するための意志一致を行おうとした。赤軍派は、「党内クーデターで同盟解体を行うことが目的となった」と、とらえていた。そこへ赤軍派が乗り込み、その撤回を要求しようとした。それが内ゲバとなり、その過程で仏議長を権力へ売る結果となった。

そして、赤軍派は、一旦「自己批判」するが、それが受け入れられないことから分派に至った。この自己批判自身、「正しいことであるが、やり方を誤った」というものであった。

党内闘争は、ブント自身の解体をもたらした。赤軍派の党内闘争の立場は、まず、自分達が正しいし、指導部になるべきで、方針の出せない無能な指導部をとりかえることに目標があった。組織としてのブントは認めず、自分達のフラクを第一に置き、党内を組織しようとした。ここに、党組織観の誤りがある。そのことが、後の一人一党という赤軍派自身のあり方をつくっていくのである。

党は、サークルではなく、個々の主張の正しさをもと

赤軍派の闘い

1、大菩薩 II 「前段階武装蜂起」の敗北に至る闘い
すでに見てきたように、赤軍派にとっては、六九年秋の「前段階武装蜂起」が世界革命戦争への飛躍の環としてあり、六九年九月赤軍派結集成会後、闘いを開始していく。

六九年九月の「京都戦争」「大阪戦争」「東京戦争」と呼ばれる全共闘部隊による交番襲撃から開始していった。これは、戦争とは名ばかりのものであったが、赤軍派にとっては、攻撃的に党一軍をつくっていくものとして位置づけられ、赤軍―バルチザン―諸私兵からなる「蜂起の時代」の統一戦線が形成されたとしている。実体としては、個別の作戦を機軸としての結集でしかなく、戦闘団を形成していくものでしかなかったのである。それはともあれ、戦闘は開始されていった。

そして、一〇・二一では、殲滅戦を位置づけをもって、全関東規模の破壊とパニック、そのパニック用の武器使用の訓練をしていこうとするが、一〇・二一の前に、逮捕そして、実際には、「パクられる為闘うような状況」となり、「殲滅戦」は展開できなかった。実体としてみる

にして動けば、解体していく。党の生命は組織性にあり、そのことによって、他の集団と区別される。党が単一の党であろうとすれば、「党の革命」は、自らをも含めた総体の問題として問題を立て、そこから党総体が解体されていく方向を持たなければ、かならず、分裂に行き着く。分裂は、それぞれの総括の一面性から生まれくるものであり、そこでの問題の立て方として、正しいものによって統合するといった時に、正しいものとしている自分達自身をも問う立場がなければ、統合することはできない。

これは、第一次ブントの分裂と共通したものであり、また、我々と赤軍派の分裂も共通している。

反対に、反赤軍派の諸派にしても、全く同じものとしてあった。赤軍派は、自己批判した。しかし、それは、赤軍派の行為についてであり、その分裂を導き出した内容までもとらえ返していない。そのことが独自の道へ、すなわち、赤軍派の立場の肯定のままに開始していくことになった。

ここで、党の問題、主体の問題をとらえ返す契機をもちながら流してしまい、誤りを拡大していくことになった。

と言葉と計画は常に大きいが、実際は全く幼稚な敗北でしかなかった。それを「蜂起や戦争は、八攻撃―迎撃―退却Vの戦術体系を隊ごとに自由に展開できる能力を身につけた党―軍をもってのみ可能である。赤軍派が六九年秋敗北したとは言え、この領域に半歩までつっこむことができた」としてしまっている。そして、「前段階武装蜂起」は、大菩薩峠での訓練中に敵に発見され、全員逮捕ということ、六九年秋の飛躍をかけた前段階蜂起は敗北した。

そこでの総括は、

「赤軍派の『首相官邸武装占拠闘争』への前史とその敗北は、まず、赤軍派自体を六〇年代一国的反帝派左派から、世界革命主体へ変革させた。即ち、革命的敗北主義によるこの高次な矛盾の飛躍の試みは、苦悩の中からそれを貫徹しようとした赤軍派に世界的主体を付与した」

六九年決戦を回避したものは、自らの変質を免れていない。―これが総括である。「赤軍派のみが決戦を闘い抜こうとした」という立場である。

そこから、第一に、六〇年代後半は、世界階級闘争におけるプロレタリアートが帝国主義ブルジョアジーと即自的であれ、一挙に勝利しようという即決戦的性格を

持っていたが、各ブロック(労働者国家、先進国、後進国)の闘いが、実際的に政治的、軍事的、組織的に統合環をもっていなかった故に敗北した。

第二に、先進国プロレタリアートの世界性・攻撃性の確立。先進国反帝派の世界革命派への成長にも拘らず、労働者国家、後進国左派が各国各ブロックの枠にとどまっていることから、①革命戦線における防衛戦略の絶対化と②一国社会主義建設―自力更生論とを解体止揚することが問われる。この矛盾の止揚は、世界的党派闘争として展開されなければならない。

第三に、この党派闘争は、帝国主義を打倒するための世界共産主義・世界社会主義建設へ前進する世界党の建設、その下での「世界革命戦争戦略の確立」として展開されなければならない。

第四に、この世界革命戦争の現実的な攻勢の準備は、国際的党派闘争のレーニンの展開で可能となるものではなく、帝国主義ブルジョアジーの一国的強権支配と、日米帝―对中国体制間戦争を現実的射程に置いた動向への転換と三ブロック台流論と闘い抜くことが、党―軍建設・世界革命根拠地創出と世界革命戦争の攻勢的展開の世界戦術の貫徹である。

第五に、この世界的戦術は、先進国プロレタリアートの高次の攻撃性・組織性・世界性を「蜂起の軍隊」に組織化し、帝国主義中枢のなしくずしファシズム政策の統合機能を解体し、帝国主義の赤裸々な国際反革命軍の行動を引き出すことによって、国内小ブル階級を安楽、NATO軍の現実的粉砕の展望のもとにひき寄せようとする戦術である。そして、先進国の階級闘争の転換をもって、現在の世界階級攻防をプロレタリアヘゲモニーに移行させ、労働者国家・後進国内部につきつけていく。

ここで言われていることは、六〇年代後半の敗北について主体的に切開するのではなく、「赤軍派が唯一決戦を闘い抜いた」とする肯定の側から、敗北を外因にもとめ、三ブロックの階級闘争の統合環をもち得なかったことが、敗北をつくっている、としている。その原因は、先進国プロレタリアートが成長した(これは赤軍派のことを指すのだと思われる)にも拘らず、労働者国家、後進国が各ブロックの枠にとどまっているためとして、そこから方針を立てている。

六九年の敗北とはどのようなものであったのだろうか? 現実には、赤軍派を含むすべての「革命的左翼」が高橋を権力奪取にむけて組織していくことができなかった。

ということであり、それだけではなく、これが一番大きな問題だが、革命主体の側が解体して行ったという事実である。そこから問題を問うていった時、情勢論的解釈として出されている「先進国革命派の成長」という主観ではなく、先進国の革命主体こそがたちおかれているという事実につきあたるはずである。そして、闘わなければならないのは、そのような「総括」を行う先進国革命主体、すなわち、赤軍派自身であることがわかるはずである。

世界党―世界赤軍という統合環をもたなかったということは、コミンテルン、コミンフォルム解散後一貫して問われていた問題である。問題なのは、それをどのように準備し創り出そうとしてきたのかという赤軍派自身の問題である。現実の世界は、一国的な権力奪取とそこでの社会主義建設をうちかためることからしか始まらず、それをどのように統合していくかといった時に赤軍派を肯定した立場からの党派闘争ではなく、先ず自国の革命を打ち固めること、そして、各国の発展段階を踏まえて、同質化していく条件をつくりあげていくことである。

六九年敗北の根本問題は、権力奪取を準備する党の指

導性が形成されなかつたことであり、運動的發展の延長上に、権力奪取を展望する第一次ブント以来の誤りの克服であり、それは、新左翼主義の克服でなければならなかつた。とりわけ、そこにおける思想的な問題をとらえ返していく必要があつたのである。我々は七五年にそのことに気づき再出発をかちとつた。

2、国際根拠地論—よど号HJから六月の解体へ

六九年の総括からの方針は「①日本前段階蜂起の貫徹を経て、北朝鮮の左旋回と革命根拠地化、七三年武力統一の促進を媒介にしての、日本全面武装蜂起との統合、かかる動向もつての毛林派の革命的変革—解体と中国の世界革命根拠地化、北ベトナムと統合してのベトナムのサイゴン攻略から東南アジアへの革命戦争の拡大。

②アメリカ前段階武装蜂起の同時推進とキューバの決定的な世界革命根拠地国家—アメリカ全面武装蜂起と中南米蜂起—革命戦争、キューバアメリカ大陸侵攻、とりわけ、このアメリカ前段階武装蜂起は、日本前段階武装蜂起と同時にこれを引き継ぐものでなければならぬ。

③西ドイツ—フランス前段階武装蜂起を軸とする西欧諸国の一連の前段階蜂起とアルバニアを先頭とする東欧諸国の左旋回、ソ連スターリニズムとの全面的分派闘争の

推進、かかる世界革命戦争の防御から対峙への飛躍を勝ち取るものとして」①、②、③があり「その突破口として、七〇年日本前段階武装蜂起が存在するのである。かつ、これを突破口として革命的第三潮流が、我々に世界党として統合され、真の世界赤軍は誕生し、日本前段階武装蜂起は、次の全面武装蜂起に向けて、永続されるのである」

そして、実践的には、朝鮮民主主義人民共和国の根拠地化へ向けたよど号HJ、そして、米国内前段階蜂起に向けた「蜂起の軍隊」の形成として実践展開されていった。

この、あまりにも壮大な計画は、どのようになっていたか？七〇年当初から開始された革命戦線の組織化を行い、七〇年秋に向けて、闘いを開始した。国際根拠地建設に向かう国際部隊を形成していった。七〇年三・三〇よど号HJが貫徹され、赤軍派九人が世界革命根拠地建設に朝鮮民主主義人民共和国へおもむいた。

このHJ闘争の貫徹は、敵との攻防の質を変えた。まず、四・一に予定されていた日本革命戦線結成大会は禁止され、次々と指導者が逮捕されていった。この権力との攻防の本格化という現実の前に、世界革命を夢想する集団としての実体が暴露されていった。また、アメ

リカ前段階蜂起部隊は、全く、蜂起の部隊になり得ず、早くも、壮大な方針は、現実の中で解体され、六月の指導部逮捕によるPBM作戦の失敗、そして七〇年前段階武装蜂起の放棄に至つた。

その現実の前で、路線的とらえ返しが要求され、いわゆる、第二次綱領論争へ至っている。この時には、すでに旧い指導者はすべて逮捕されており、組織的な継承性も、統合する指導性も失つていた。

そこでの総括は、獄中、獄外の個人個人のものとして進められ、基本的には、どのように軍事を貫徹するかにあった。明確な七〇年秋前段階武装蜂起の総括と転換方向を打ち出し得なかつた。とりわけ、根本的な総括として赤軍派の思想理論総括が点検されてはいかなかった。ここでも、総括が自分たちの主体の問題へと至っていないために、次の敗北を準備した。

3、まとめ

赤軍派は、第二次ブントがもつていた、もともとの本質的な誤りを拡大した。

第一に過渡期世界論としての歴史發展段階、現在の世界を一國の枠ではなく、総体をとらえるという視点をつくつたことにおいては意義をもっているが、その根

本的な誤りは、それをとらえ実践する主体との相互媒介的な段階・分析がなく、敗北に対して情勢論で総括し、方法を変えるだけで主体的な敗北の根拠をとらえることができず、方法は変わっても同じ誤りを繰り返すことになつていった。そして方針は、歴史的發展段階をそのまま持ち込むことにおいては主観主義に転落した。

第二に指導性のとらえ方が運動的牽引性におかれており、第二次ブントよりも更に極端化し、軍事によるエスカレートに置かれた。そして、基本軸は、軍事を担う党ということにあつた。それは、党の役割について正しく認識し得ていないということであり、情勢の中での運動的牽引は、その情勢の高揚していく時期のものであり、党は人民の自然発生的闘いを目的意識的なものに変えていくこと、人民の闘いに継承性と系統性を与え、蜂起の陣型を創り出していくことがとらえられていない。とりわけ、運動展開を自ら担うことが中心であり、革命主体としての人民をどう援助するかということがとらえきれない。

第三に、赤軍派の総括の誤りに一國社会主義可能論がある。ソ連社会主義建設の中での失敗、とりわけ、スターリンの誤りを一國社会主義の立場から生まれている

としている。それは、社会主義の公式や、これではければならないという自分たちの描く姿から切り捨てている。過ぎない。ソ連社会主義建設の誤りと失敗は、人類の未踏領域である社会主義建設の中での不十分であり、それは今後も、いろんなかたちで立ち現れてくるものであ

る。それは一国社会主義か否かという問題ではなく、その領導主体そのものが自らを変革しつつ、国際革命の勝利のために内実における同質化を物質的にもかちとるかどうかという問題である。

以上が基本的な問題としてある。